

# 平成16年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 スケトウダラ

学名 *Theragra chalcogramma*

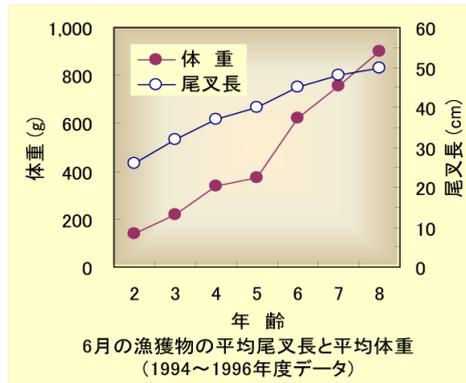
系群名 オホーツク海南部

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 10歳以上  
 成熟開始年齢: 4歳  
 産卵期・産卵場: 3~5月、北見大和堆~宗谷地方沿岸およびテルペニア(多来加)湾周辺  
 索餌期・索餌場: 初夏~秋季、オホーツク海  
 食性: オキアミ類、カラス類、クラゲノミ類、ヨコエビ類をはじめとする小型甲殻類、その他イカ類、魚類など、本海域では周年魚類の割合が高い  
 捕食者: 不明

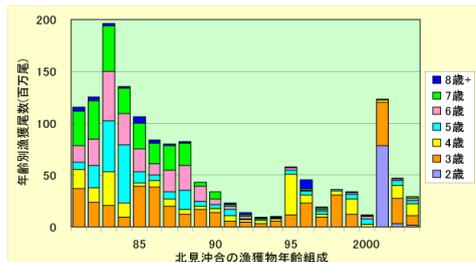
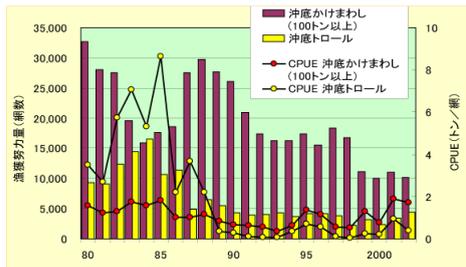
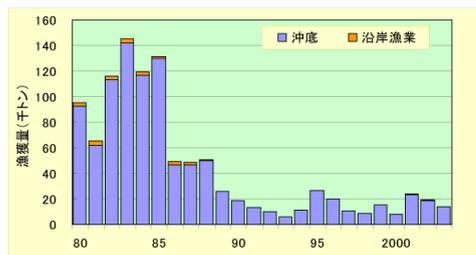


## 漁業の特徴

本海域で漁獲されるスケトウダラは、ほとんど全てが沖合底びき網(沖底)による。漁期は、流氷の接岸期を除くほぼ周年にわたるが、近年では5、6月と12、1月に漁獲量が増加する傾向にある。

## 漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半までは100千トンを超えていたが、1986年に半減し、以降1988年度まで50千トン前後であった。その後、1989年度には26千トンと再び大きく落ち込み、以後6千~27千トンの範囲で推移している。2003年度の漁獲量は14千トンであった。

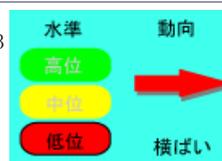


## 資源評価法

本海域に分布するスケトウダラには複数のグループが存在し、日ロの水域を回遊していると推定されている。日本漁船による漁獲量とCPUEの情報があるが、日本水域で得られるこれらの情報が資源全体の状態を代表するものとは判断できない。しかし、利用できる資料が他に無いため、ここでは、日本漁船による漁獲量とCPUE、年齢別漁獲尾数の推移などに基づいて、資源状態を推測した。

## 資源状態

調査船調査の結果、豊度が高いと推測された1999年級群の加入によって、近年低迷していた沖底の漁獲量とCPUEは2001年度に上昇した。しかし、1999年級群は、2002年度に3歳魚で漁獲された後、2003年度には大きな漁獲をもたらさなかったため、2003年度の漁獲量とCPUEは減少した。1999年級群以降では、豊度の高い年級群の加入情報はない。日本水域の漁獲量とCPUEは1989年以降非常に低い水準に減少し、近年もその水準からほとんど変化しておらず、資源の水準は低いと判断した。資源の動向は、漁獲量とCPUEの推移から横ばいと判断した。



## 管理方策

調査船調査の結果等から1999年級群が高豊度であることが示されながら、加入直後に大量に漁獲された後は、低い割合でしか漁獲物に現れていないという結果は、漁獲が資源(1999年級群)に対して直接的な影響を与えた可能性を示唆するものである。このため、漁獲の制御が資源状態の向上に効果をもたらすものと考え、現在の漁獲水準を引き下げることで、資源の回復を図る。そこでABClimitは過去5年間の漁獲量×0.7、ABCtargetはABClimit×0.8とした。なお、ロシアは、オホーツク海(サハリン東岸)の2004年のTACを5千トンと設定して漁獲規制を実施している。

	2005年漁獲量	管理基準	管理の考え方	F値	漁獲割合	評価
ABClimit	11,300トン	0.7Cave5-yr	漁獲圧を減らして資源を回復	-	-	-
ABCtarget	9,000トン	0.8ABClimit	漁獲圧を減らして資源を回復(予防的措置)	-	-	-

## 資源評価のまとめ

- 隣接するロシア水域での漁獲状況が不明で、評価が困難
- 日本水域の状況から、資源は低水準、動向は横ばい傾向
- 2001、2002年度に資源豊度の高い1999年級群を多量に漁獲
- 1999年級群以降、豊度の高い加入の情報はない

## 管理方策のまとめ

- 資源の回復のためには、現在より漁獲水準を引き下げることが必要
- ロシア水域の漁獲状況の情報収集が必要
- ロシアもTACを設定して漁獲規制を実施している(東サハリン海域:5千トン)

## 全国資源評価会議等における主な意見及び回答

### 主な意見

当該系群の資源評価には不明な点が多く、資源に対する漁獲割合等についても全く不明であることから、過去5カ年における平均漁獲量をABCとすべきである。管理基準についても現状漁獲に近いものにして欲しい。(北海道機船漁業協同組合連合会)

### 回答

漁獲割合については不明ですが、かつて100千トンを超えていた漁獲量が現在その1/10までに減少していること、ロシアの東サハリンでのTACが日本の2003年度の漁獲量の約1/3の5千トンであることなどから、海域として資源状態は非常に悪いと考えられます。また、2001年度に漁獲量が増加しましたが、これは近年では豊度の高かった1999年級群を集中して漁獲した結果であり、この年級群の豊度が低ければ、これだけの漁獲をあげることはできませんでした。この1999年級群による漁獲量が過去5年間の平均漁獲量には入っております。さらに、1999年級群以降に豊度の高い年級群の発生情報はありませんから、今後資源が増加するという確実な情報はありません。これらのことから、現状の平均的な漁獲量を維持したのでは資源に対して過大な漁獲圧力をかけることとなりますので、1999年級群の影響の排除や資源状態が非常に悪いことを考慮して係数の0.7を決定しました。

資源評価は毎年更新されます。